

✈ 海外生活 だより

ロンドン事務所

クロイソイガムリ

Croeso i Gymru! (ウェールズへようこそ!) ウェールズとウェールズ語の魅力

ロンドン事務所所長補佐 辻井 泉子 (神戸市派遣)

イギリスの正式名称が「連合王国 (United Kingdom)」であることをご存じの方はたくさんいらっしゃると思います。では、「連合王国」はいくつの「国」からできているのでしょうか。

正解はイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4つです。2014年に独立の是非を問う住民投票が予定されるなど何かと話題に上るスコットランドや紛争問題を抱える北アイルランドに比べて、今一つ目立たないウェールズですが、独特の言語と文化を持つとても魅力的な「国」です。その魅力に惹かれて、私は今ウェールズ語を学んでいます。

ウェールズについて

ブリテン島西部、アイリッシュ海にちょうど突き出したように見える部分がウェールズです。面積は約2万km²と、四国より少し広いくらいで、人口は約300万人です。

比較的平坦なブリテン島において、スコットランド北部のハイランドと並んで山が多い地域で、長い海岸線、豊かな緑に覆われた起伏に富んだ



ウェールズ南部には日本と同じく海藻を食べる習慣がある。海苔の佃煮のようなペーストをトーストに塗る海藻料理「ラバーブレッド」(左端)

(写真提供: 赤池所長補佐)

地形に点在する湖や川など、美しい自然に恵まれ、その面積の約20%が国立公園に指定されています。

かつては石炭や製鉄など鉱工業で栄えましたが、現在の主要

産業はサービス業、機械工業、牧畜や観光です。首都カーディフにはBBCのドラマスタジオがあり、イングランドのマンチェスターと並んで映像産業が盛んです。

ウェールズとウェールズ語

ウェールズにはウェールズ語と呼ばれる独自の言語があります。ウェールズ語はケルト語の1種で、ゲルマン語である英語とは全く違った系統の言語です。同じケルト語でもフランスのブルターニュ地方で話されているブルトン語とは同系ですが、アイルランド語、スコットランド・ゲール語とは系統が異なります。ウェールズ語の母語話者は、現存するケルト語の中では最大の約70万人で、このうちウェールズ在住者は61万人、ウェールズ人の約20%にあたります。

1536年にイングランドに併合されて以来、ウェールズ語は英語より劣った言語とされ、教会以外の場で話すことは禁じられてきました。19世紀初めには人口の80%を占めていたウェールズ語話者数は、産業革命による工業化の進展に伴うイングランド人の流入や差別や弾圧などのため、1901年には50%まで激減しました。

1991年には人口の18%まで減少したウェールズ語話者数は、しかし、ウェールズ語が1993年に公用語と認められたことと、1998年に発足したウェールズ政府による義務教育での必修化によって、僅かではありますが増加傾向にあります。

現在、ウェールズ政府の発行する公文書や道路標識などはすべてウェールズ語と英語が併記されています。ウェールズ語専門の放送局S4CやBBCウェールズの放送を通じてウェールズ語に接する

機会も増えてきました。デジタル化による多チャンネル化が進んだ英国では、ウェールズ以外の地域でもこれらのTV放送を通じて、生のウェールズ語に接することができます。



有名な「世界一長い駅名」もウェールズ語。
フランヴァイル・ブーフルグィンガフル・ゴゲリッフウィルンドウロブ
ーフル・フランティシリオ・ゴゴゴッフと読む。

ウェールズ語を学ぶ

ウェールズ語の普及率には地域や世代で偏りがあります。南部より北部、東部より西部と辺境に行くほど、また、大人より学校でウェールズ語教育を受けた若者の方が率が高くなります。

ウェールズ語の普及を政策の柱の一つにしているウェールズ政府は、こうした学習機会に恵まれなかった人たちのために、ウェールズ語教育センターを設けて普及に努めています。また、各大学でも合宿研修や公開講座が開講されています。インターネット、TVなどによる自主学習メニューも充実しています。

ロンドンでは、ウェールズ語の教室は、生涯教育センターCity Litとロンドン・ウェルシュセンターで開講されています。私はロンドン・ウェルシュセンターのコースを受講しています。

ロンドン・ウェルシュセンターは1930年に設立されたロンドン在住ウェールズ人のための交流の場で、合唱などのサークル活動や国技ラグビーの観戦会、ウェールズ語教室などを通じて、ウェールズ文化の振興に努めている非営利団体です。



ウェールズ語教室の先生とクラスメートのみなさん

ウェールズ語教室は初心者向けから上級者向けまで4講座5コースが開講されており、私は毎週火曜日夜の初心者コースに通っています。15名のクラスメートの大半は、家族の誰かがウェールズ人である、近い将来ウェールズへの移住を考えている等、ウェールズと何らかの所縁のある人たちです。私のように何の所縁もない外国人が受講するのは極めて稀なようで、最初は驚かれましたが、センターの方に伺うと、これまでに何人か日本人の受講者がいたそうです。日本人以外の外国人の受講は少ないらしいので、ウェールズには何か日本人を惹きつけるものがあるのかもしれませんが。

ウェールズ語と英語

これまで「ウェールズ」という語を用いてきましたが、これはサクソン語で「外国」を意味する言葉が起源の英語で、ウェールズ人はウェールズのことを「カムリ (Cymru)」、ウェールズ語のことは「カムライグ (Cymraig)」と言います。「こんにちは」は「Prynhawn da (プリンハウンド)」、「ありがとう」は「Diolch (ディオルフ)」、「さようなら」は「Hwyl (フウィル)」で、英語とは似ても似つきません。

このように、ウェールズ語と英語は、語彙はもちろん、文法、発音、綴りが全く異なり、英語の知識から意味を類推することはできません。文法自体はそれほど難しくはないのですが、音韻変化による語形変化や、「LL」に代表される特殊な発音は日本人には大変難しいものです。大きく息を吐いて喉の奥から発声する音が多いので、毎回教室が終わった後は、喉がからからになります。

馴染みのないように思えるウェールズ語ですが、実は英語には少なからずウェールズ語起源の単語があります。例えば、ロンドンやテムズなどの地名はもともとケルト語起源の言葉ですし、一説によると、「ペンギン (penguin)」の語源もウェールズ語だそうです。とすれば、日本語にもウェールズ語の起源の言葉が存在することになります。

外国語である英語で講義される他の外国語を学ぶのは難しいことですが、とても張り合いがあります。帰国後も勉強を続けたいと思います。